季寄
註解 改正月令博物筌 十二月部 三

十五

十二月部目錄

△印ハ俳諧の季なり。印ハ季なしなり

十二月　卦　陰陽生　異名和名並註

△小寒。三候　三ノ子　律引　初ノ子

△大寒。三候　三ノ子　詩書十二月

△土午童子の像を立る　三ノ子

日令

朔日　△乙子朝日　四ノ子

△乙子餅　川浸　四ノ子

△恩日御飯　四ノ子

三日　△御國忌　四ノ子

△臘日　四ノ子

八日　△臘八　臘八粥　四ノ子

△臘八　温糟粥　四ノ子

十日　△御體御ト奏　五ノ子

十一日　月次祭　五ノ子

神今食　五ノ子

十三日　△事始　五ノ子

△荷前使　五ノ子

十五日　△寂勝寺灌頂　六ノ子

中午　△御髮上　六ノ子

十九日　△御佛名　六ノ子

△被縁　六ノ子

廿二日　△大德寺開山忌　七ノ子

廿七日　△柏梨勸盃　七ノ子

晦日　鬼祭　鬼の現象　八ノ子

廿九日　△小晦日　八ノ子

尾張津島
紀成明珍藏

△生身魂 八丁
△豊前幣川神事 八丁
△伊勢齋宮編馬掛 八丁
△御貢物 八丁
△米洗 八丁
△門松營 十丁
△年守 十丁
△大節季 十丁
△分歲 十丁
△節分 十丁
△大年 十丁
△太神日 十丁
△除日 十丁
△除夜 十丁
△年籠 十丁
△岡見 十丁
△大祓 十丁
△追儺 十丁
△豆打 十三丁
△爆豆 十三丁
△撒豆 十三丁
△福内 十三丁
△魔祓 十三丁
△柊挿 十三丁
△柊賣 十三丁
△鰯挿 十三丁
△鬼頭 十三丁
△貌枕 十四丁
△厄拂 十四丁
△屯著 十四丁
△吉田大祓 十四丁
△厄塚建 十四丁
△五條天神詣 十五丁
△勝の餅 十五丁
△京賣 十五丁
△寶船 十五丁
△大原雜喉寐 十五丁

月令

△衣配 十五丁
△札納 十五丁
△煤掃 十五丁
△暦 十五丁
△古暦 十五丁
△暦末 十五丁
△巻つる暦 十五丁
△巻納暦 十五丁
△右ふる暦 十五丁
△節季候 十六丁
△逆茅 十六丁
△星佛賣 十六丁
△年木 十六丁
△年木樵 十六丁
△年取物 十六丁
△年の市 十七丁
△毬打賣 十七丁
△ぐりく賣 十七丁
△ほごて賣 十七丁
△まゝご賣 十七丁
△節松賣 十七丁
△餅搗 十七丁
△餅花 十七丁
△年忘 十七丁
△寒聲 十七丁
△寒ぎ 十七丁
△寒垢離 十七丁
△寒念佛 十七丁
△臘 十七丁
△嘉平 十七丁
△澈祀 十七丁

時令

△寒の入 十七丁
○狀
△年内の春 十七丁
△冬の春 十七丁
△年の内の春 十七丁
△歲暮 十七丁
△年仕舞 十七丁
△年の名殘 十七丁
△年の別れ 十七丁
△年のくれ 十七丁
△春とうい 十七丁
△行年 十七丁
△其外詞品々 十七丁
○歲暮狀 十七丁

草木

△冬梅 十七丁

△早咲梅 △早梅 △寒梅 三多 …… 廿三ノ表
△臘梅 …… 廿三ノ表
△探梅 …… 廿三ノ表
△寒竹子 △孟宗竹 …… 廿三ノ表

生類

△八目鰻取 …… 廿四ノ表
△寒鯉取 △養輪田鯉取 …… 廿四ノ表
△鵲巣ぐゝ …… 廿四ノ表
△雞乳 …… 廿四ノ表

必用

此部ハ風雨の占破軍のむき方日ごとよりの他行のべ得。旅山の心得。衣服の正式。生花正式。天気こ候等をのせ。十二ノ表ハ廿九丁メ

養生 …… 廿四ノ表
△屠蘇の方 …… 廿四ノ表

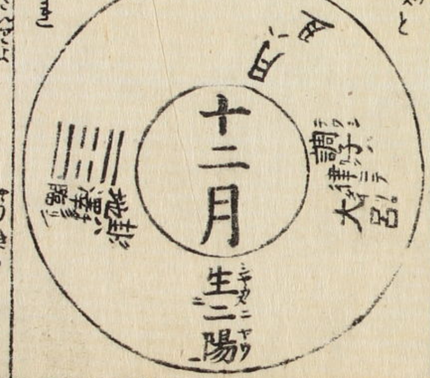
飲食

△鯛味噌 …… 廿四ノ表
△煮凝 …… 廿四ノ表
△凝豆腐 …… 廿四ノ表
△寒曝 …… 廿四ノ表
△寒の餅 …… 廿四ノ表
△寒造酒 …… 廿四ノ表
△菜飯 …… 廿四ノ表
△鹿賣 …… 廿四ノ表
料理献立 …… 終ノ表

十二月目録終

十二月の部

△印ハ俳の季に用ひ来る物〻



二陽生ずといへども未だ地下ふかくて陰気盛んにして陽気を動かす事なき

調子ハ大呂とハ大呂ハ陽氣出んと欲して陰これをゆるさじとの意〻

○卦ハ地澤臨とハ水澤腹堅とゆゑ意まて陰さうん小閉て陽氣泄る所ふたゝび氣が和せざるゆへ地澤ハ臨んぐ水ととしむる意〻月令廣義

十二月異名

△臘月 唐書○語平月史記△季冬礼記○涂月雨雅○窮節顔延之詩

○急景白氏文集△殷正纂要△暮冬紹精△杪冬唐詩△二陽月事物異名

和名 異名

△三冬月 藏玉 △春待月 同 △梅初月 同

△こしよつむ月 秘藏 △年つき月

△しわす月 莫傳 おやこ月 同 △師走

△かぎりの月 △乙月 △新月 此月の名

異名 和名註

△臘月とハ此月 儺をして 先祖を祭る由 臘月といふ

儺の譯ハ北丁目ふ出。嘉平月とハ秦の始皇臘の名をかえて嘉平とせり

○季冬ハ冬の冬ゝ義。○涂月ハ爾雅ニ十二月を涂とゝたり

○急景ハ氣色の短くせハしきなり

○窮節ハ節のつゝまりつゝるといふ

○殷正ハ殷の代の正月ふいる月。

抄冬ハ抄ハこゞゑとゝ字なれゞ冬ゝ乃末とゝるゝ。○陽月ハ二陽生ゞる月とゝ夏ニ。乙月の譯ハ朔日の所ふ見るべし。○志はすとゝハ四時のさつる月なきバ志はすとゝをすつゝ通音なれゞ又師走。師とハ僧之此月ハ古へ僧を迎て佛名を唱ふ今の棚経ふ同ド僧の走ゝ

月名ハ前ふいへり奥儀抄。真淵の説ふ年極とかきてとしゝ月とゝる月とゝ事ゝといふ

(哥)藏王 春待月

こゝまてゝ行年ハ冬ふそゝ春待月きいそゝきうる

同 梅初月

梅ハ冬ゝつほむ枝ゝとはのゝえて梅ゝ月のゝろいろえく

秘藏 年よつむ月

冬の上ゝ年ゝ行むゝ月いくかさ絲ゝゝゝゝもゝ行まいりきぬ

師走

行ゝ年ゝ冬ゝの空ふ物ふゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝのゝれゝゝ

業平

莫傳 暮古月

このゝゝゝれ今やけゝらんゝゝゝふゝかさ
ゝれゝこの月乃ゝゝろに物ゝ

藏玉 三冬月

定家

物ゝゝゝ物ゝとゝえゝゝ三冬月
いゝゝふゝゝ空のゝ冬さ

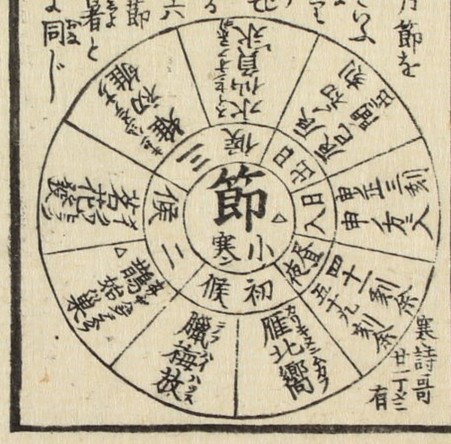
莫傳　ものいつ月

わるものとたまをはつる歌ゑ月
わるやいのちのためしなるらん

(俳)ある師走や卓小枝密柑　鴉谷
七猪の伸るに踊る師走哉　冠里
五郎丸も狀とかゝけて師走哉　石貞
横笛を吾が月のまゝ隠乙
扇わく後よ師走は巨燵哉　積雨

(狂)正月の樂屋さびくるひくるふで
分るも師走の打つり箱うり　家蔵

十二月節を小寒と云陽極て陰生じ寒となる六月の節を小暑と云ふ同じ

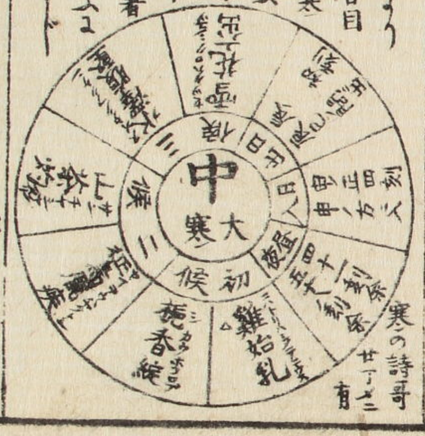


小寒

節の名○七十二候○草木七十二候
昼夜長短○日の出入等左に記す

○雁北鄕ハ陽に順ふて北に歸ること月令の註に有り○臘梅放ハ此頃咲くなり臘梅の譯ハ廿八丁に委し○鵲始巢ハ鵲ハ木を巧て巣を作りはじめのこと詩よりも多く作りなるのなり

節より十六日目を大寒という六月の中を大暑という



○雞始乳と六月令の註に雞ハ木に属して畜類なれハ陽氣こゝろきゝ後の形なり

○此頃の陽氣ふくらて始て巣を定る故に名花發ハ茗花ハ茶の花○雉始雊ハ月令の注に雉ハ火畜なれ陽氣に感して聲を出すこと有○水潛氷ハ水仙の花氷を負ふ立のびる事なり

大寒

中の名○七十二候○草木七十二候
○昼夜長短○日の出入等左に記す

いと事こゝろ乳の字をつるむとよませたれば陽氣に催されてつるむ事をいふなり

○梔香綻とハくちなしの花のひらく事なり

○征鳥厲疾とハ鷹鳥のこげーくなるこゑ

○山茶灼とハつゞれの咲ふなり。水澤腹堅とハ水のあつ澤の氷が上下とも張つめる事〻。雪花六出とハ雪の花ハ六ひらづゝの也〻雪のちきうに降る事なり

天氣 東風吹バ晴天〻冬の土用寒 寒ごゝしバ来年六月ひでり

大寒日 △土牛童子凡像を立。文武天皇の三年十二月ふ天下疫癘ふく死とる者多ゝしゝバ禁中ふて土の牛をつくり。難をはらひをさせゝ。唐土にも土牛凡像をつくりて國々の郡縣よりたゝ寒氣をはらふすゞみひとしきる事なり

日令

此部ハ十二月一ヶ月の日凡定なる事支の定てゝる事をきるれ

朔日 △乙子朔日。物の始を甲といひ末をしといふ故終りの月の朔日なれバ乙子といふなり

俳 貧乏のいとなみ多ゝ凡和 凡東

乙子餅。弟子餅とも書く

○今日餅を食ふ年の間無事にくらし一今日朝日の終りとなるゆゑ元日ふ餅をいとゝふ

○又一説ニ今日もゝとるべしふゝ〻ひく今日もゝとるべしは唐土凡臘日の祭の餘風なり

俳 乙子膳ゝ〻ゝ食ふ 宗旨

川浸。川ゝゝ脛。今日の餅ハ喰ふ時ハ水難をのがゝと江戸よりも東ゝらいへども今日ハ川ゝゝとらゝ深き譯ある事〻委しく臘の祭論者

朔日 忌日御飯 季子六月 三丁ふ委く記ル

三日 ○今日沐浴ゝしバ災火をさる

○京太秦佛名會今日なり

三日 △御國忌 今日ハ天智天皇御忌日なり。近江国崇福寺にて行はる崇福寺ハ昔ハ志賀寺ともいはれし寺にも哥に詠じ八雲御抄 中世三井寺に移しける也へ今ハ舊跡のみのこれり天智天皇ハ聖天子にて中興のあるじにて渡らせたまへバ御国忌といへバ此君の事なり

上卯日 大和 ○大神祭。卯辰の両日なり委しくハ四月之れ四ノ六丁メに委し

子日 今日延又ハ畳の表を日にさらせバ蚤虱を去る事妙なり

六日 不成就日

七日 此日遠く行などしバ必也く所に遠せぬぞ

辰日 △臘日 委しき譯ハ廿一丁に有

八日 △臘八 唐土にて今日をいふ

八日 △温糟粥 △臘八粥。釈尊今日暁の明星を見て道成し給ふ日之故に本朝にも京都。天龍寺。相国寺。東福寺。建仁寺。萬壽寺。右五山にて粥を製すといふ所製の粥ハ昆布串柿大豆粉薬菓を合汲。唐土にも此日寺々にさく、いろいろの加薬を入れ粥を煮て喰ふ又檀家へも饋る是を臘八粥といふ。道成乃よし委しく博物筌シの部より出す

八日 今日竈の神を祭れバ大に幸ひあり祭神委しくハ歳時記に出れ。唐土后陰子方といふ人臘乃日朝早く起て米炊きけれバかまどの神あらはれて見へける子方是を拜しく幸ひを受く家に黄なる羊ありしをもつて祀りけれバおのづからしく大富を得たりとぞ

八日 京都 。智積院に論義ありてのち一山酒宴をなれ

八日 妙藥 。今日の水を貯へ明年病ある時飲めバ能く万病を治す。此水にて丸藥を製方する時ハ大に妙なり。今日

の水よ燈心を浸して明年火を
ともせバ蛾皆去る廣義に出ル

十日　御體御卜奏　十一日　月次祭
季ハ六月　季ハ六月

十一日　神今食
季ハ六月

○右御體御卜。月次祭。神今食ハ朝庭ノ公事
なれて六月十二月両度行ハるゝ行ゝ國し
六月の條ニ記ーなる尚委くハ補遺ニ出

十二日　山城
○南禪寺大明国師忌日
○妙心寺開山忌。博物筌ニ委し

十三日　事始
○正月事始。今日内裏に
大臣以下正月の行司を
定む又天皇元日の御裝束等を辦
備ふ。民家ふも今日より正月の
入用の品試ゝこの〳〵用意をなすと
煤拂おゝく八今日をなるなり

(能)はゝ〳〵も又慶稜る事始　鷺水
事始ハ物も〳〵ゝ人う記　杉風

(狂)のどうる正月るのはゝ〳〵
せゝ〳〵氷の解そあもせよ　政長

十三日　荷前使
○昔十陵八墓を定め
られ其所〳〵勅使幣を
奉らひーとい荷前八初穂とを
よこて神に奉るといふ義。十陵と
いふハ御代々天子の陵十ヶ所。八墓と
いふハ親王大臣方の墓八ヶ所なり此
事八崇神天皇より起ーと四
季物語に出ル尤勅使い吉日ば
撰ばるゝ今日ハ定むるといへり
(能)内裏八電ニて行ル十陵使　野史

十四日　不成就日
○今日より十六日まゝ
泉涌寺佛名會

十五日
○今日沐浴ーて身を清むれば
無病ーて諸の災をまぬる

十五日　寂勝寺灌頂
今ハ已し舊跡
八岡崎にあり
灌頂の事ハ〳〵ゝ俗佛事篇
といへる書ニあり面白きこゝなり

中午日　御髮上
○藏人御髮の梳を
扇を賜ひ主殿宣

人松明を献じ、焼くこと上鵲ハ
ぬけくる髪を箱に入置此日やき
て灰に沉香を和し器に入まと
よき地にうつむ。一説下午とかく

十九日　御佛名。名だいめん。雲の上人名乗とること
いと。僧を請じてこの三世の諸佛の
御名を唱へるなり三世乃佛は
御名をとなへまこと作まる罪を
雪とこもに消るなど哥ふも詠り
。禁裏にて十九日より廿一日まで
行はる仁壽殿の御本尊を移し
て御帳の内にうけ佛前に香花
庭に地獄の画の御屏風をたて男
女とも佛名と唱へ。名だいめんとよ事
八佛名終て殿上人各名を名乗とかふ

哥　三世の佛の名を立てるものしの
つくもやこよひのこゝろ　俊頼
千首　あはれのかゝるまでとなへても
佛の御名ぞのこるゝ　師兼

俳　風ふくこゝろ地獄も屏風　曾風
佛名やゝ宗貞の袖もこゝろ　疎松

狂　地獄の絵ゑかいてゝ佛名も
かゝぬもの極ゑ　來中

十九日　被綿。佛名の導師の僧に賜へ
蔵人くゝ僧に肩ふ

哥　堀川次郎百首
かつけるわくひきけよおろかなく
ひろくゝ〜んせかかくして　俊頼

俳　寒風ふ切まて音へつけ蛙　蛙峯

十九日　柏梨勸盃。昔摂州柏梨と云
地を左近衛府よ
よせうりをれより此宮府ふ其柏
梨の地の利分と以て酒を造る
おゝ〜く佛名の夜ふ飲宴をとゝ
をかやゝ一の勸盃とかいふなり

廿日　山城　嵯峨釈迦堂とゝはゝ
本尊開帳あり

廿一日　。今日病人を見舞ふ事ふるまゝ
必ゝつゝ。猥ふ川端へ行ことなれ

廿二日 不成就日 ○今日房事をつゝしめば三年の壽を延ぶといへり

廿二日 山城 大徳寺開山忌 今宮の南紫野にあり開山を大燈国師といふ延元二年十二月廿二日寂

(俳) 若菜人皆ゆかりゆかりの大燈忌 秀井

廿三日 ○一遍上人の忌日 時宗の寺ふおゐて不残法事あり 博物筌ふ委し

廿四日 照虚耗 ○今日床のしたに灯を照せば貧をかへて富貴を得

廿四日 灶神送 ○今清の世ふハ今日灶神天ゑ上て一日ゐりとゝく家々灶神の札ゑ供物をなし禮拜し神を送ると云て其札を焼すとぞ又正月元朝ふ神を迎ふるとて新ふ灶神の札を張りて物を備へ祭る

廿四日 占候 今日米の飯を碗ゑ盛てかまどふ供まバ家内安全ありさて来年の事をうらなふふ其供へる飯をうちわけて見るべし碗ようるほひあまバ来年よしほどよ雨ふりてさかりになら ど雫のたるふどぬきてあるを来年大水出るとされひろ外碗の底かまひくゐるゝ来年大ひでりなり

廿八日 ○鉢叩結願 極楽寺の本堂ふて踊念仏ありて結願をなすと云事也

廿九日 小晦日 明日を大晦日といふゆへ今日をかくいへり

晦日 魂祭 今日なき人の来る夜とてたま祭をなすと 報恩経ニ出 昔ハ今日も也て七月の條よ委し田舎よハ所よよりて今も祭る也俳ふ公暮の魂祭とう又ハ冬の景物ゑ結びて季とす

(俳) 魂祭るとゐへさぬわハ我か郷 立甫

(哥) 夫木 なき人のくるよときけど君もなし我すむ宿やたまなきの里 和泉式部

生身魂 両親又ハ親族の存生乃人を別棚をまつりひ祭る

田舍よハ其風儀今もの〻ことにて七月の條ニ委〻　俳よハ〻〻の景物を結びく〻ことゝなるべし

俳　こてもみゝ巨燈てなれ書ハ　乙州

晦日　京○祇園神前大般若經轉讀

晦日　都　同子刻ようけづくかけ神事いろ〻

晦日　豐前　和布刈神事　今夜丑の刻　社人帶劍出て鎌を持松明をつけ海底ニ入ると云潮水左右ニ開き干ゑ紙うがひ和布を一鎌刈取る〻元日神前ニ供ゑると云ふ社ハ豐前企救郡隼部村ふゆう故ニ早鞆の社といふ昔此所長門国ニ属し神功皇后の時ゆう豐前の国ニ属し

俳　踏抜さふゝんの下や和布刈の夜　荷雪

こゝろ〻と釈ハ和布刈の夜の露　衛守

狂　和布をかりて神ハとゝつる大みたゝ　雪峯

日　伊勢　齋宮繪馬掛　伊勢齋宮村の森ニ祠ゆう

今小さく繪馬を掛る其繪ハ稲と砂金袋の繪を書何ともたゝれまかけおくゝ昔此所ニ齋宮あゆう其時ハ今日大祓あゆて繪馬を奉し齋宮の儀式絶〻其例ニよゆう繪馬を掛るよや○又今夜繪馬を掛る事行疫神を宥むるゝざとゝ云ふ増山井ニ出そう

俳　社ゝの画る家ゝ掛る　柳水

御贖物　公事根元ニ六月ニ同し

とあゆ出るに六月乃部ハ世日ニゆゝ註ニハ四れかゝけを指〻〻上ふもうたる紙ニ穴をあけ御いき吹入るゝ弘仁五年六月ニゆう御藥の事ニよゝてはゝ

御贖物奉る大うゝハ素盞烏尊の千坐置戸の祓なゝとゝゆう起ゝ

ぬる事ゆう云〻○按ゝるに根源の説おゝつゝるゝ〻ゝきのゝとのちゝ

おきゝとゝうむゝるなゝはゝれ其罪を贖ふ○かのゝ〻ひの義〻天子乃

息を入らるゝハ御罪をふきうつして卅日の祓ふらるゝハせの人御うる代の心よおるゝどかゝ屋ゝされば両月とも卅日はゝひの御ゐゑなるべゝ

(俳)一息の五穀地やゝよ代の実る　荷風

卅日 大祓 (俳)大祓はゝひともねいけもあり　素能

卅日 米洗 卅日ふかぎゝふ餅米を洗ふもの一説ニ九日ハ心長閑ふ樂んが為米ゐど卅日ハ洗ひ貯へ置ともいふ

(俳)米ゆゝひわとて繁くおうる　管月

卅日 岡見 今夜子の刻高き所ふのぼつて東の方を見て朦々と霧の如きハ明年凶又明らかなる時ハ明年吉○又今夜高き岡ニ登て簑を逆さまに着て遥ニ我家をミれバ明年あるべき吉凶見へると温故日録ニ出

(哥)ゐとゝゐれおほつゝかさに居見ゝすることをえみゝにけまを紙とうる　俊頼

(俳)帰田田義ゐほへかる景人ゐ　夏井

杉卅の色を先ゝ入る岡ゐんうなよ　可水

卅日 門松 門松立るゝ(俳)門松を笑ふとゝやゆけゐうう梅指

とゝやゆけゐうう　堀川

(哥)夫木　山ゐ門の外もつかるゐ立てうゐ

ゐ年所祝ふまを忘へゐ　堀百　門松ゐとゐるゐるゐるその花に

まゆゝふ松ハかゝゐゐゝん　顕季

卅日 年籠 伊勢大神宮ふ此夜ゝうゝ

こもりこゝ元朝神拝をゐん

○一説ニ伊勢大神宮へこもるばゝうゐゝくもあゝぐゝうゐや

(哥)夫木　老らくのかくまんゝふ言のゝちのゝうゝゐゝ人ゝゐれゝもゐよ　信實

此哥の心ハてハ守歳と同一意ゝう

(俳)年ゝまゝうゐゐゐゝ　芦帆

卅日 年守 ○守歳　春をむゝくるとゝ東菱ゝ

卅日 大年 △大晦日。年のとてゐ大の字とゝゐゝうぐ

廿日 **大節季** △掛取(俳)掛もよ取屋 △あんせん柿の花 兎凉

○掛取ハ雑ともく〳〵○大年 大晦日大拂のとけ委〳〵く日本歳時記拾遺に出〳〵り此書ハ字義を正〳〵諸書の故事を引き面白く論あり見るべし

廿日 **除日** △除夜△除夕。除ハのぞくとよむ字ゆく今年ゞのぞき去ること来年ようるをの〳〵

○除日詩哥左ゟ記ス尚歳暮の條見ベ

伏見院

(哥)御集

こよゐ〳〵もなのこちハのこりけきゆく
たゐいきくなる春ふるのゝん

源重之

拾遺集

いさゝつりるおのゝこしハ
はゝとハいりとやろくもきき

(詞)ゝゝのこと言ハ。ゆゝの言ハ。ゆゝの言ハ。としゝ竹の一夜だろう。やとことしやら〳〵。春ハ〳〵なる。たまゝゝる。春のと名。年もいぬうゝ。年八一夜

(連)ゝゝ公ゝとゝゝ公ゝ年の暮 紙巴

(俳)隣〳〵へ年玉紙人老の坂 支考

ゝゝの一夜あちゝゝや花の去 今

ゝゝ方ゝ表とゝゝ大三十日 竹川

大三十日琴ゝゝよゝめゝの春 湖春

ゝゝくと大年の市ゝ坂の春 半窓

大廿日やゝて底ぬけみなの川 連孤

ゝゝゝ大晦日ゝゝまゝ 紅素

(狂)さゝめゝ紀世のゝゝゝゝ 貞左

いゝゝゝゝのゝゝ

廿日 **歳暮** **分歳** ○唐土ニハ大年ノ夜先祖ヲ祭テ家内打ヨリ酒宴ヲナシ金銀錢ナドヲ家族奴婢等ニ贈ルヲ云トソ

萬年糧 唐土ニハ廿日ノ夜米洗ヒ籠ニツニ米ト飯ヲ盛リテ上ニ松柏ヲサシ・寮柑等ヲ置テ元日ヨリ三日ニテ飾ヘ今ノ蓬莱ノ飾ノ風ナリ

燒燈 此夜院々ニ燈ヲ燒コト如白昼トイヘリ

設火山　階帝除夜毎ニ殿前諸院火ヲタク事山ノゴトシ又コレニ沈香ヲタキテ火光暗時甲煎ヲ以テソヽク香數十里ニ及ブ一夜ノ間沉香二百余秉ヲ用ユ甲煎二百石ニ過タリ　隋書ニ出

醉司命　都人除夜ニ至テ僧ヲ請ヒ看經シ酒菓ヲ備テ神ヲ送ル合家簪ヲ燒テ紙錢ニ代ヘ竈馬ヲカマドノ上ニハリ酒ノ糟ヲ以テ竈ノ門ヲ塗ル　是ヲ醉司命トイフ事文類聚ニ出

詩　除夜　吳鷄

老稚均欣一載安　オヒタルモワカキモヒトツニコトシ
一年安ラカニ暮シタルコトヲヨロコブ　低吟淺酌共盤桓　タヒウタヲウタヒヨイホドニ酒ヲノンデミヲくユルリトシテ井ル　瓦瓶春透屠蘇暖　ヤキモノトクリニハ春ノ氣カトラツタカシテトソノ酒ニアタヽリガクル　石鼎香銷柏子寒　ヨガフケレバ石ノカナヘニタイタ香ガキエテ寒クナル　無限世紛多鞅掌　イロくノ世間ノ用事デ多ヒケレド　那知天運又更端　トキノヘハリアハセハシレヌニタ一年アラタヘル　迎新送故須臾事　ヨムカヘフルイ春トシヲ送ルモワヅカノ間ノコトジヤ　不倦挑灯坐夜闌　タイクツセズニトモシビヲカキタテ夜ノヤムルマデスハツテ井ル

詩　除夜五字對句　同上

夜將寒色去　今宵光景舊　來日歲時新　アスハトシモトキモアタラシウナル
燈向曉光新　トモシビモアカツキノヒカリニ向フテ新ウナルヤウナ

詩　除夜七字對句　詩楚

晚景莫追窻外驥　コトシノクレノケシキハドノヤウトノヒカゲヲオフコトヲスナ　一夜去　ココヒ一夜ニ年ハイシテシマフ
春風不染鏡中絲　アスハルカゼハガミニウルシラガヲノメテモクレヽイケレド　五更來　ヨアケニハ春ガクル

節分　追儺

△鬼やらひ　△なやらふ。鬼追ともいふ　昔ハ卅日ノ夜なりしが今ハ節分ニ行ハるゝ。疾鬼と邪氣を指ていふ追ものらふ。疾鬼とハ陰邪の氣人を傷ふものを追ものらふ為の義ゝ其鬼と名づくる者ハ熊の皮を冠ふり鬼の面を着て黑き衣に赤き裳をつけ斧をとり桃を持て禁裏の四門ニ立其時陰陽寮祭文をよみ上卿已下桃の弓蓬の矢をもつて是を追ひ射る世間問答ニ出り

○なやらふとら事ハ源氏物語ニ出て儺やらふとい事ニやらふと追ふと云義ニて

（哥）夫木

九重の宮のゝ人やらふやらふ乃おとゝよとも聞ふりつゝ郭

前大納言隆季

家集

貫之

ぬきゝゝも祓のうちハミのうさ分ぬきゝゝやこゝろひ人こゝろ

（俳）鬼やらひ紀つゝ手すゝ拂ふ持丹

なやらふや迹ゝ八実ふゝ成り　寒林

追儺の杖鬼の女房ハ涙乳ふ　孟弓

鬼やらひなるの武器の仰合しき　榮姿

（狂）迹やらふ鬼の目ぬも匹ッのめ

めでゝくはらふ　けき即代　信舊

（詩）宮詩　王建

金吾除夜追儺名畫袴朱衣

四隊行金吾ハ鬼やらヒ勤メルモノ　宮名ナリモナリテ鬼ヤラヒヲツトムルナリ　院院々燒燈如白日流香

火底坐吹笙役所ノ二ハ火ヲタキ燈ヲ

又禁帝ノオモムキハンデカナルモノニテ其中ニ樂アリ　流香ヲタクハ階帝ノトキノ故事ナリ

節分　按ずるに節分の夜とする儀式鬼やらひ。ほゝし豆。

ひいらぎ。宝舟。厄拂の事ハ昔ハ晦日ニ行ふ有ども晦日の夜ハ来ぬ年のまつけふ事ハ今世ハ中世ハ右等の事を節分の夜ハ尚委ゝ紀すけハ年中風俗考ふ出たり面白ク事ニ見るべ〳〵

豆打　△爆豆△撒豆△福ハ内△鬼ハ外。禁中ハも熬豆と撒〻く疫鬼を はらハせらるゝ事 宇多天皇のゝ比より始る民家ハも豆をうちて福ハ内鬼ハ外と雜をなり豆をうんぞのハ来る年の支よ當る者つとひ是を年男といふ又豆を打事ハ魔目ハ打といふ義ゝ風俗考る出

○唐土ハも今夜赤丸と五穀をうく事後漢書の註ゝ出 赤丸とハ豆づきの事ゝ

(俳)ゴをとる鬼ゝえいくゝぬ豆　其角

入ぞ年やロの内てのゝ鬼を外　了雨

鬼ゝ逢ゝ内の鬼ハ外　来山

柊挿　△柊賣。冬も青翠ゝして負を守るゝ操ゝ本艸時珍の説ゝ

○世俗ゝ門戸ゝさゝして目つゝ鼻つゝとて同ゝく鬼を追ゝ神代巻にいゝらきゝ柊のゝとゝゝこの縁よりゝるや

鰯挿　△鰯ゝ頭さゝ。井クシサスゝ頭さゝ。いとしのかゝらハ疾鬼邪鬼のきゝふものゝ由ゝ今日さゝるべゝ。土佐日記

節分の條ゝ曰なゝのかゝらひいらきゝ小家の門ゝさゝといふ事あるゝなゝハ鰯の古名と思る然ゝども勢州ゝくハ鰯乃魚をなゝゝとゝひ名詰とも呼いゝ事ゝ是ゝる事ゝ

○井クシ井スとハ節分の夜鰯の頭を門ゝさゝをいふ 呉竹集ゝ出

(哥)世の中ハ数ゝるゝゝもひいゝゝの負ゝいゝもいゝとゝ切ゝ 為家

(俳)ゑの緒の文字ゝ寒葉 松雅

柊ゝ刺ゝすふ前ゝ柔時の書 也鳳

(狂)柊さゝ豆てゝ打もゝかくれうさ

ゝめゝゝゝゝいゝゝゝゝゝよ 自左

貘枕　△貘の札。白澤といふ獣乃事ゝと白樂天ハいつゝ節分

の夜獏の図を畫く枕とをれハ悪夢を見ず諸の邪鬼を避る事妙なり俗ハ獏ハ夢を喰ふ獣なりとも云ふ依之左ふ獏の正像を出す

○唐白樂天獏屏讃曰

寢其皮辟瘟
圖其形辟邪
今謂之白澤

○五法水を寫したる此御像を家ふ所持とれバ時疫や病うつらぬ風狸悪氣其外諸の怪しきものをなし事なし　万一怪しき事ハ

う又ハ怪しき病人ハ此白澤の像の前ふ向ひ呪文を唱ふまばきいげん神の如し　近世ハ大坂吉文字屋市左衛門といふ本屋ふて五彩あく写したる此白澤の像を賣るなり世間ふハ守札と違ひ渉世錄其外諸書ふ出ず正しき事なり余も此像を家ふうけて凶事の吉事となりたる事多し依之諸人の為ふ記す

(俳)もしもよ兒を産ふ獏枕　蓼国

(狂)とてもあふ法世の夏を獏ふ入十年でもふれぬ一口　湖月

厄拂

厄落。節分の夜民家の門を厄拂ひ来ふ云ふ

て乞人ふ通ふる者ふ少しれ錢を与へまバ俗ふ祝詞をとなへ去る京大坂ふ専らハ事ふ田舎ふもあり国ふうて今ハ毎家ふ社人来りて祓をとる所も有り是ハ禁中ふ此日ふ行ハるゝ大祓の余風なるべし　厄拂の事哥

いちてゝの沖ふ立てとふハ素盞烏尊ふ千ゝ代置所ふ物をとして拂ふし

ふ其千ゝ代置所をちてれ沖といふ

べし。祇園ふうけの夜ふも身の厄成拂ふ今為何なるものゝ如ても我身ふ添ひ

なる物をうまと道ふ落し歸さるのなハ

せも同じ心の人々厄年迷慎む譯なるべ
ふ厄のとけ委しく　日本歳時記拾遺より出

(俳)性なる信今人うう厄はらひ　貞雄
ゆまるれや迯拂ふ　一厄拂　恕由

(狂)ぜぜをちるとて行ようみる事と
やくをもたぬやくを拂へよ　駄足

京都　**吉田大祓**　節分の夜ト部家吉田の齋場内陣おく祓を修行ると式へ正月十九日清祓と同じ。又節分の朝ト部家宗源殿おて神道護摩を修ちこ疫神齋札三千枚を出し諸人受くゝ門戸ゑ貼る

厄塚建　節分の夜吉田神祇宮おく行はるゝ其式庭上ゑ塚を築くゝ祭文をよむ是を厄塚建るといふ正月十九日ゑ此塚を取拂ふといふ正月の條ゑ見るべし

(俳)厄塚も空うゆたゝ拂ふよ　桐宮

京都　**五條天神詣**　勝の餅　白求賣。節分の日ハ禁重長へ

白求小餅寶船を上るゝ節分ハ夜諸人參詣して右三つの物をうくる白求ハ家ゑ歸りて燒へ白求と燒邪氣百鬼を辟るといふ小餅皇求とも舊例ゑよりて是を賣む近世ハ其材物を社司ゑあうて製せ一む

○小餅を勝の餅と書くハ小と勝と同音ゆへなるべし一說ゑ此餅ハ社地の內勝軍地藏尊に供る餅也（こゝの一祭神本尊九月十日ゑ配）

(俳)ゑいのせてシくゝ彦公寺勝の庶中声

寶船　紙ゑ宝舟七繪を書て節分の夜人の寢る床の下に敷之

○或人のいゝく寢ハいねく我を稲と
て舟ゑ積ゑ丸心ゑうるべし除夜明方
に人のまどろむハいねつむとの事ふ同ド

(俳)見拔ていぬきにこせ宝舟　看月
宝舟ゑ乘ハ人ゑ　厚平
枕妻と二人ゑ寝やなゝ酒の酔　半竇

(狂)たゝゝふ祓ハこれでもよろれども
おもゝぬ見の祓の神ゑ　捨哲

節分 △大原雑喉寝(おほはらざこね) ○山城国大原江(ゑ)文明神(やしろ)の祠へ里の男女参詣通夜して夫婦(ふうふ)のかたらひをなすといふ ○山州名勝志ニ曰昔蛇井出村の大淵(おふふち)といふ池に大蛇(じや)住む時〱里に出て人をとらんとせしゆへに蛇出るときを男女一所にあつまり卧(ふ)してかくれなり これを大原ざこ寝といふての事より起るとぞ 其後ハ節分の夜産沙(うぶすな)神の拝殿にて通夜するとぞ

俳 せめてもの鼻で見利のさてねじ 鬼貫
不機嫌な元日もある雑喉寝哉 文人

狂 よい程のうるおいまとわもひしれふくろさる猫う大氣のうち 遊糸

月令

此部ニハ十二月一ケ月の日の定まる事を記す

△煤掃(すゝはき) △すゝはき △すゝはらひ ○すゝはらひを歳暮(せいぼ)の祝とせし事ハ百姓ハ春ハたがやし夏くさぎり秋収(おさ)む冬の其暇(ひま)ぶ得て一年よごれたる煤(すゝ)をはらひて春を迎ふるよしへ祝ふなれハせらり又内裏(だいり)の煤(すゝ)はらひハ陽成院の御時よりはじまりけん此事させる公事(くじ)なり あらたは墨物語に出 ○家に煤の凝(こ)るを繁昌(はんじやう)とす神代巻大巳貴命(おほあなむちのみこと)國讓文中(ぶんちう)にあり ○唐土にも掃塵(さうぢん)といふて此月をとはらひをなすと見へたり

哥 かけらきや外山のさとの冬のにしきもれあやもはらふなり 經行

俳 すゝはきや何ぞ一つも捨られれ 支考
まことはきハさいはうさいて仕舞なり 仝

狂 としよつても邪中て出よするはらひなかせの松もかこうかしまハ 樂水

△衣配(きぬくばり) ○源氏玉かづら巻に衣くばりの事あり其文に書すかきむき八年のくれに人々の装束(しやうぞく)かずおやんおとなえんとへくぜさせていろくさを

ぐるきぬを御覧じていと多かりける物なるかくしふ恨ぬれやしにぐるぐき事とて御衣櫃箱どもふさせ給ひてこれはかまへいとこまぐして入ること有ごとくふ衣をくぐりめぐるハ源氏のおもひ人たちへのまさせるり民間わも親属奴婢などふたりゆるさせ申て鬼物かどもこゑきぬくげこゑり

(俳)いろくやくはもまのくれこと園宮衣こゑり下司かとまくふるり　大立

(狂)これくふむ配てのきぬくはり一こゑにたりきまるこゑり　松花

札納

門戸よはりたる寺社の札とりおさむるなり

古暦

△暦の末△巻はつる暦△巻納暦△右ハ巻暦

(哥)新六帖　二こゑの暦れおくふ色よせくのる日数のかももくゑ　知家

(俳)ゆくしき日も四六日を古暦　良道

妻のくれ暦のまれ二三す　逍風

(狂)暦ハ小ゐ流霞あの事ハ月ゆくこゑ　流霞

節季候

△嬉等。乞食がかゝれ裏白をさゝゑんさゝて家くふ来る節季ひだひくと呼ひりて米をもふだいくハんだひくと乞食の言なるべし昔ハ赤き織ふく頭面ぬつゝ烏帽子を着ゐゝと。嬉等ハ乞食の妻など同じく白毛繊ふ顔をつゝみ赤前ぶれて自婆芽等といふ〻〻米銭をもふ此ものハ京師ものゝ出る

(俳)いの付く芽季ゑ馬尉玉くゑいとおりくて来ゐ芽季ハ蜂房

(狂)都ゐたゝ世ゑ人坂のせきれゝと通ゐくゆ世ゆれいゐハくと世ゆゐ　貞柳

星佛賣

年初ハ其年の厳星を禁中ふて祭ひ御修法ある西ハ四月十三日佛師来年厳星を曜の像を造て禁裏ハ奉る民間ふも世ゑハ

とうぶ（東）へ来年の属星を按行して賣物
○属星とは八九曜星と人の五性に配し
て毎年の属星とする也。九曜とは
日月木火土金水羅計都合九星也

年木　△年木樵。内裏へ薪を上る八
御ゑぼし木として早春とれば
おつるおきてなどり木などと稱し其木
をきる者を年木樵といふなり

（哥）夫木　後九条内大臣

ゆるしなの山のいくせ川のいくとせ乃
いそくとしの木をたにもたつらん

（俳）花のちく木も樵る老の身あり　雪紅

（狂）花も実もなるものとり木といつべくりとこ　祐喜

年取物　正月ふ用なるかざり米年
木其外来春用ゆる物を
年内にとり貯るをいふ

（俳）九陽度の老織いとふ　許六

年とり市　正月の儀式に用ゆる物を
賣る市をいふ△毬打賣
△ぶりぶり賣△えごいる賣△神の折
敷賣△かやうちぐり賣△楪賣△ぐ
賣△穂長賣△葉竹うり△餅松賣
△かさう藁賣△神の皿賣

（哥）市に出くさるものいとれるこゆ此の
いそくハはるのいとれるこゆ　久定

（狂）この市ゆきうれいとけるゆうれ
いうてうくのこゆ此市とは　了海

餅搗　△餅花△餅むしろ。賃搗
△青むしろ。長寿れ社餅
○正月祝ふ餅を年内つきそ新しき
延に載れくうう。餅花とハ小さい
餅を柳の枝に数多つけくえるの
かざり紙なり。賃搗とハ繁華
の市中にハ金穫杵臼など持て人の家
へ来て一臼搗賃何ぞ賃を取て
搗をつく三四十年前ようむてきろ
○柱餅とハ肥前の長崎にて年の
内の餅搗にハ終てこの一臼を柱（養母）
置正月十五日東土の火にて焼て食ふ

(俳)降つつき音ちさ蓑よ鶏の尾　支考
降つきよ我わられ下女ちかく　来川

(狂)湯気のこの雪の中にうる涙つきよ
いつまでもちしぬ雪もぬるかう　貞柳

年忘　年の暮又親類朋友互酒宴をもてなをいとまなり　唐土ハ也
此事あり名づけて激散又ハ別歳
とい　東坡集にも出たり

(俳)人ハ死ねとの雲せく我とも忘　芭蕉
薫好ハ死ねとの下ハ年忘　支考

(狂)年忘ひとりしてうき言の葉ハ
思ひ出ーてたそかれーの森　甘露

寒聲　寒声つよ寒弾ハ詩端
寄かと調ふ者寒風ハ向
ふ〜修行ハ三線あぐ聲立る
者寒中に外みく修行と

(俳)寒ぶ我つ西る二三遍　天夢
寒ぶ我ハ語ぶ　及氏

寒垢離　修験者の類寒中に
水を浴び身をきよし
て神を祈るとい火伏るぐいいく
家々ハ水を浴さけく銭を與る
もかう又信心の人ハ立願ーて
行ぐ〜浴るもかう

(俳)寒ぶ我ハ被て寒ぶる徳夫
寒ぶ我ハ被て寒ぶる癖もあ　羅人

寒念佛　寒ぶ念佛ハ寒垢離の身を
懲ぶ行ぶ又七墓三時ハ同じく夜々修
行ぶ

(俳)おのあれ撞木ハ細ーを会社　支考

臘　臘日ハ蜡臘ハ嘉平ハ清祀
唐ハ八四時獣狩ハ十二月
の狩を臘といふ臘ハ獵との義ぶ
獵ーて獣を捕て先祖を祭又百神
を祭ることをいふ冬至の後第三乃
戌日為臘百神を祭る漢の世ハ戌
日を以ぐと魏ハ辰日を用ひ晉ハ
八丑日を用ひ梁ハ未寒ぶ近
き辰日を用ひ此祭ハ夏の世に
ハ嘉平といひ殷の世ハ清祀と

て周ハ大蜡といふ漢ハ臘といふ風俗通の禮傳ニ出ル○臘ハ先祖を祭ること蜡ハ百神を祭ることなり同日にして祭異ニ玉燭宝典ニ出ル○按ずるに社日の祭れ類ふて社日の祭ハ民の行ふ所臘ハ上一人より下万民ニ至るまで先祖をまつりまた諸の神を祭り互に酒宴をなし祝ふ事本朝の祭れ如くなるべし

○本朝ハ十二月朔日ハ祝いて喰ふ餅を用ひ又餅ハ此余風なるべし　季冬ハ水の終ること辰の日ハ土れ位ニ水土を祭ること故ハ川ひろうとのこも據ありと風俗考ニ出

○哥ふ冬の狩と六日足なり古の習俗ハ皆もろこしをまねる事ことなるべし

詩　臘日常年煖尚遥　臘日ハイツ年モ暖ル

臘日常年煖尚遥　臘日ハイツ年モ暖ル

催スコトハダッタ　今年臘日凍全消　ニナイコトジヤカ

臘日ニハ氷モノ　侵凌雪色還萱草　コラズキエタ

雪ヲシノイデ　漏泄春光有柳條　萱艸モハエ

ミキヲチラト見セメハ　縱酒欲謀良夜　ヤナギノエダシヤ

醉　オモフサニ酒ヲノンデ　還家　コヨヒノエヒヲタノシマフトオモフ

初散紫宸朝　朝庭カラ家ヘモドンテシンデンノ礼義ヲ

クツロイダ口脂面藥隨恩澤　面ニツケ

ケルクスリナドヲ拜領、スルミナ君ノオメグミジヤ

九霄翠管銀罌下　アヲイフエヤシロカネノサカヅキモ　ミナ拜領モノジヤニヨツテンニカラ

アマクダツタモノノヤウニオモフ

詩　五字對句　同上

宴禮非迎氣　獵獸逢良日

今日ノ酒宴ノ礼義モケフカリニ出トツタケダモノ　陽気ヲ迎ルデハナケレトハヨキ日ニアフタノジヤ

司神為報功　吹豳屬令辰

冬ノカミサドルカミガ功ヲフエキウタウタフノモヨ　ミセナサルヘノジヤ　キヨニヨツテジヤ

臘日故事　勞農　漢書季冬ノ月農人百姓ナドヲ子キラヒ

酒サカナ等ヲ賜フテ天夏職トアリテ天地人ヲ祭ルノ意ナリ

時令

此部ハ十二月一ケ月乃時候ヲかゝるあらそを記ス

寒

寒の入。寒の入ヲ寒気ヲ覚ヘバ寒気ヲ覚ヘバ

(哥) 肌さゝるおもひふたむく苦しめとむとゝいもゝかくゝ人へ(〻まゝ) 舎人

(俳) から鮭も空也の痩も寒れ中 芭蕉

寒ゝ人意ハ(〻)ゝ寒のうち 吐雲

(狂) ゝぐがゝく麿ガ武ゝ紀ヲ為ゝ

まゝゝりかゝるおまれゝげゝさ木端

(詩) 寒夜　宋張耒

寒夜客來茶當酒　客ガ来タレバ茶ヲワカシテ酒ノカハリニスル

竹爐湯沸火初紅　竹ノフチヲカケタ炉ノ湯ガワヲ

竹ノフチヲカケタ炉ノ湯ガワヲ

尋常一樵ノ火モツカイニヲコツタ

窻前月　イツモヲナジヤウナ月カゲモ

纔有梅花便不同　スコシ梅ガ咲テアレバカノ月カゲガツ子トチガフテオモシロイ

(詩) 寒五字對句　同上

急景流如箭　童子愁氷硯

短イ日カゲ　ナガレテ行コト矢ヤウニハヤイ　コドモハスゞリノコホリタノニコマリ

凄風利似刀　佳人苦膠盆

モノスゴイ風ガキビシク肌ニアタツテカヂキルヤウナ　ウツクシイ女ハ膠ノイヤガル

(詩) 寒七字對句　詩礎

苦寒氷合分流水　衣狐裘

サムサヲキラフジブンハホウ〻ヘ分レテ流ル水モ一ツニコホリ合フ　キツネノカハゴロモヲキル

欲雪雲垂四面山　紙窻寒

ユキガフリソフデ雲ガ四方ノ山ニオホヒカヽル　カミデハツタヘドガサムイ

寒之故事

肉陣

申王巖寒ノ時ハ妓女ヲ坐ノ側ニアツメ圍居セシメテ寒ヲフセグ楊家妾ノ肥大ナルモノヲヱラヒテ行列セシムコレヲ遮風肉陣トイフ開天遺事ニ出タリ

鶴語

晉ノ大康三年冬寒甚シ南州ノ人ニツク鶴ヲ見ル鶴語テ曰今年ノ寒気ハ堯帝ノ崩ゼシ年ノ寒ニ劣ラス晉書ニ出

(狀) 寒氣見舞文

時維栗烈寒威侵人
未審動止佳勝不倦
庸劣依舊無煩軫念
聊裁寸楮奉候

(同) 書替之文

天寒氣縮○烈寒凛々○涸陰奇
寒冐骨毛○履冱清福○眠食
清安○鰥生○小子○吾儕○陋生

久不聆清誨義可奉問反
賜高教慰問愚老之癡枯
深感至情伏審雅履万福
寒甚自玉是祈

年内立春

△冬の春△年の内の春○委しくは正ノ九十ニ記

除日立春

十二月晦日を除日と云

(発句) 家集　紀寿の実は遠慶喰
見けてあふやえろ〜んまのえの風
(連) 心〜紀春や一枝の初梅哉　昌叱
(俳) 有る事はしたれば遠のやぶ蕾　季吟
(狂) 月日はめぐるもえ来ぢ
のつくさるもえ来ぢ　常鑁

歳暮

△年仕舞○哥の詞よく季に用ゐるものハ次の條

よゝ印をまるに。十二月廿日頃より
廿日ゆゑを歳暮といふ。歳暮
の賀といひ親類朋友互に物
を送り合ひ無事の終年を
よろこぶ。唐土にも此事は
東坡が詩にも見へたり。年の末
を歳暮又は年の尾などいふ深き
譯あり。歳時記拾遺に委しく面白きのゝ

哥　万葉　三月の花者うつろひぬ年の内に春は来にけり

古今　ふるとしの春のなかばにあらねども人の心ぞ先だちにける

後撰　せくとてもとまるべきかはとしの内に春の来ぬるものとかは

拾遺　ゆきつもるおのゝ年をいとはしと思ひそうれしき

金葉　人知れぬ思ひ絶えぬる物なれば春の来ぬるもうとからぬかな

新勅撰　ふる雪にうぐひすなきてとしの内に春の来ぬるものとかは

續後撰　人とはぬ苔の外にもものとはぬ人のこゝろ

新後撰　我身世にふるにつけてもいとはしきとしの内に春の来ぬるを

柏玉　河歳暮

河年はふる川の瀬をふたてるあれ
ときみ〜春ふる人をあはぬる

雪玉　家々歳暮

玉ぶすまの家ゝ花ぶさをかざしぬ
垣ねの中も年をこすめる

同　山家歳暮

年ふるゝ山ゐにかすめる門うち
はらふ人もなしとふるねゝ

詞　△年の名残△年の別れ△年の別れ△年の名残△年惜む△年惜△行年△歳の暮△暮の夜△年の尾△年の終△流年△年の内△年の暮△年を送る△年の内△年の暮△年を送る。年内流年。ちうづく年。かとみといそぐ。年末未年

ちうづく年。かとみといそぐ。年末未年

○はるのいそぎ。せわしくなる年。年を惜む
○うつりゆく年。流るゝとしをせきとゞめぬる
老の波をかさぬ。暦のおく。人毎に老を
むかふる。としのかつりゆく。新に身につ
もるとし。しやくもあるとしの暮。とし
よせる年波。むかふるとしの夜。とし
の矢のはやく。とぐるまのまはる月日。
○年の尾年の暮の事くはしく
歳時記拾遺といふ本に見へたり

(連) あらたまる年にひかれて暮ぬ年もなし 行助
和歌とかやいふこともなき世の暮 宗長
役人もなくくらしてあかる山かな 昌林

(俳) 月雪とのさばりけらし年の暮 芭蕉
蛤のいけるかいあれとしのくれ 仝
蓑笠をもちて眉雪白し年の暮 嵐雪
年をとるはいくつになる人年の暮 其角
正月もまた二日路を年の坂 支考
行年や京へとうとう状をやり 湖春

(狂) いふさまれおきつちぎりとて眉の霜
からの暮をくるとしかな 百甘

十二月ふしみのさとしのつえ
光陰ゆくも山ぶしのやし 栗園

よどみなく正月がくると
たえまきもの車かな 被根

(詩) 歳暮 羅鄴

檢曆儀鸞臘月逢
カニ臘月ニアフタヤウニオドロク
年光何事太
怱々 トシツキガナゼニコノヤウニセハシウタツゾ
三農閑
暇功初畢 フユハノウニンモヒマデアツ ノシワザガスンダ
萬室收成歳已終 イヘイヘニモノナリヲオサメテ
リニナツタ ノテトシノヲハ
歷々寒風號古
木 サワ／＼トスルサムイ 風ガ古木ニヒビク
蕭々晴雪
落長松 モノシヅカニモツタユキガ タカイマツカラオチル
何人得似山翁樂榾柮無
烟活火紅 ドコノヒトカオレガヤウナ 山ズミノオヤヂノホタウチ
クベテ火ヲクワツクトオコシテ タノシムモノニオヨバブリ

詩　歳暮雪對句　同上

看雪何妨醉　傷懷殘臘去
ユキヲ　ミテハナンホウモ　スミヲ　ナゴリオレフイモフケレドト
テモカマワヌ　又

尋春即有期　屈指早春來
ハルヲ　ケンキヨ　スツまルヲ　ユビヲ　折テミレバツヒ
モツヒ　今ノコトジヤ　ハルガクル

詩　同七字對句　詩楚

歳暮陰陽催短景　冬欲半
トシノクレニハ　月モ日モ短イ　フユモユカバスキタ

天將霜雪際寒霄　歳又殘
ソラカラ　シモユキヲ　クダシテ　トシハスコレノ
サムイヨフニシラセル　コツテアル

歳暮之狀　白駒過隙忽徂改
月日ハヒニヒカヒニヒ　ヒトヒトシタチカヘル
ヤウニオモフ

歳誰可脫世紛況於足下
ヨロニナルタミナクトリコム　シブンナルニ　ヤシナ　キサニハ

公私之忙乎幸偷閑責臨
コウシノイソガシキヤサイヒヲスンテカヲフニリンセヨ

命小酌以遣鬱悶呵々
ダサレスコシノサケヲ　申有テコノウツウツヒラキヤウ以上十二云ズ終シ

歳暮之狀書替ヲ記ス

歳華荏苒一年將盡。歳華驚換。人皆奔忙
トシノ　ハヤ　ヒトミナ　ホンマウス
シハウニイハンヤオイテスベ　シノ　アクニ　ハヤ　ヒトミナ　ホンマウス
レヲ　モヤ　ヒガタツテレバ　ニヒツクリスル　タレモ　ハヤ　ヒトミナ　ホンマウス

四方況於吾子饜紛擾乎
シハウニイハンヤオイテスベ　シノ　アクニ　ハヤ　ヒトミナ　ホンマウス
イソガシキコロナルニ　ミテ　ヤ　ヘノコトノオカイソガシキヲヤ

狂顧舉盃少逐風塵
ケウコセヨ　アゲ　ハイヲ　スコシタベ　ホンウ　ヒンヲ
オイデクダサレサカヅキヲトツテ　フエート　世事ヲワスレテ　ニシウ

草木

此部ハ草木ヲ総ツメ　ルヒ

冬梅
ふゆびめ
梅ハ春ノ物ナレド年ノ内ウ咲ヲイヘリ早梅ハ次ノ部ニ

哥　六帖　いつれをかはるきてらまし　梅の花ちるまでにふるる
ノ花枝もとをゝにふるる
拾遺　おれはえへて　梅ハ咲ふるる
けるゝハ我身ありけるの　貫之
千載　雨もしの垣ねの梅ハ咲ふるる
かいうりあるとはけるも白ゝ

連　みさくやしくとろれ梅の花専順

俳　屋根おく綿帽子哉　梅の花文考

早咲梅

△早梅△寒梅いづれも早く咲かる梅をいふ

早梅ハ十月前冬至前ニ花開くと梅譜ニ出ル△寒梅ハ香ゐ〳〵九月花開くと花譜ニ出寒梅を十月の季ニ出し〳〵る俳書も誤れども俳ハ十月の梅ハ〳〵ろ〳〵咲とゝるやへいづれも十二月ニ〳〵可ゐ〳〵んゝ

哥　柏玉

ゝ〳〵〳〵もあやふく見れやあの見れあ〳〵しゐ情き物のゝ〳〵花

後柏原院

連　雪ふのゝ咲せてやん物の花　宗祇
初ゝけハみるまゝおもむかさもゝる　肖柏

俳　早咲や独一ゆゑふ物の花　支考
早梅や序宮の里れ雲屋敷　蕪村

詩　寒梅　我昱

一樹寒梅白玉條　一木ノカンバイガシラタマノエダノヤウニミゴトナ

溪橋　トホク村ヤ野ニサシカヽツテ根モトハタニガハノハシニツヲテアル

臨村野傍

不知近水花先發　水ギハニ逆ラフヤナノハヤクサイタノヲシラスニ

疑是經春雪未消　春ヲヘテモキヘヌまゝ年ノユキノ残ソタカトオモフ

臘梅

常の梅の花ハあ〳〵ゞの花の形狗蠅ニ似たり故ニ別名狗蠅梅ともいふ色黄ゝ〳〵香甚し〳〵故ニ檀香梅ゝも

又色によりゝ〳〵ゞ淡黄梅ゝも

一本朝ハ後水尾帝の御宇ニ始ゝく朝鮮ゝり貢ゞ

○梅ニ似ゝく梅ニあ〳〵ゞと活法ニ出

詞　臘梅詞

詩　輕盈半度縷金囊不似西施粉態粧　アッサリトシタスガタノハナデキンシテクンタフクロノヤウナニヨッテ西施トイフ美人ノケハヒタテタスガタヨリハヨイ

爲是來從真蠟國　幾人爭踏小黄香　コノハナ

ハモト眞蠟国トイフトホヒクニカラ来タハナジヤニヨツテオホクノヒトガワレイキトシヤウヒシテ小黄香トイフ名ヲツケタ

詩　五字對句　同上

花裏重々葉　不施千点白
ハナノナカニオホクノ葉モニテル　オビタヽシフシロイハナハサカヲドモ

枝頭點々春　別作一家春
エダノサキニチラ〳〵トハルゲシキガミエル　冬ノマニワシヒトリノ春ヲミセル

探梅　冬の末ふ梅をたづねてつくなり

俳　春をさ探ふ梅ふ和尺る彩湿ふを義

寒竹子　孟宗竹。薩州ふ生ずる竹冬筍生ぜ小さくして味美なり。鳳尾竹といへる竹ふも冬筍生ずれども細くして喰ふべからず三才図會ヨ出

○冬の筍　孟宗と名づくる事ハ唐土呉の国に孟宗といへる者あり母よ孝あり

母筍ヲ好む也雪の中ふ竹の林よ行しふ孝心を感じて冬ちつ生じ筍生じ出り則取ちて母よ供ぜとつゆ廿四孝ヨ出

今ハ竹北根ふ蓄ヲ出早春ふ筍生ず風

俳　孟宗弁紋の竹作いさせりつ紀　自風

生類

此部ふハ十二月一ヶ月の生類をかけむ

八目鰻取

北国ふおふし殊ふ訥訪の海の厚氷ふ下ふ穴をふし火をそ紀氷を破りて其穴よりふ取なり

妙薬　小児の疳又ハ省目を治ハ奇功あり　寒ふ取るる春夏ふ乾しハ悪し

俳　八目鰻伝説の面白ハ　由山

寒鯉取

〈其輪田鯉取。常州ミのうさハ水の流を濁しだ江ふ近ふ湖ふ通ず依て魚の味美し

俳　鯉ふや駒吉ふよりむ山ふ千林

鶏巣さゝ　雞乳もけハ口の二テ三ツ三ツ差

必用

此部ハ十二月ノ月の要用の事ヲしるす

破軍向方

夜九ツ 卯ノ方	夜八ツ 辰ノ方	夜七ツ 巳ノ方	
朝六ツ 午ノ方	朝五ツ 未ノ方	朝四ツ 申ノ方	
昼九ツ 酉ノ方	昼八ツ 戌ノ方	昼七ツ 亥ノ方	
暮六ツ 子ノ方	夜五ツ 丑ノ方	夜四ツ 寅ノ方	

日刻　○子ノ日　西ノ日　○子ノ刻　酉ノ刻　ロトリヨアシ　事をなすハ用ひべし

方角　此月家普請他行西の方角て吉〻天道西ハ行くべし

樂事　此月ハ四時の末ハいまだ得る折なれバとゝ〻ゆるりきぬくゞりなどうたをうたひぎ皆春待心よりなる祝ひねどおかく或そなふ庭園ハ梅開くわと聞くハ

巻ハ新暦くりてへ行ハ即書中の人ハ似〻り其雅趣ハ〻はうゐ〻夫茶室炉辺の奥尚閑人の時を得ゝうとりべし

衣服式

拈色　○梅　五節より　女　紅　同　單　白き上着　櫻

椿衣　面　藤芳　裏赤　五節季より後ハ用る事も有

脂燭色衣　ぬき紅　たて紫

生華式正

寒梅　水仙　寒菊　寒ノ牡丹　寒百合

天氣占候　此月紫の雲ハ風ハバ大風ゐり赤雲ハつゞハひあり○戌亥の雲ハ風ゐり○此月ハ雨のもち風を生ゞ東南のゝぜハ久〻〻吹ど○虹あハ人民わゞらゝ虹さびくゐハ大豆のゝゝ高〻米も高し○霧あゝハ来年五穀よ〻〻来年

冷る霧多々しバ来年旱ふく
稲悪――○上中旬雪ふれバ来年
梅雨中雨なふり○寒中ふ雷なるバ
米の價高――又来年秋洪水あるべし

養生

孫真人曰此月ハ甘きを減し――苦きを増――心ハ
補ひ脉をとゝけ腎を調理とゝ
○寒中に天門冬茯苓細末――て
酒又ハ水ゆ〳〵服をべ――多く用
れバ薄着ゝく能く寒をしのぐ
右の外養生の法委く延寿養生
論ふ出ゝり大に益あり見るべ――

屠蘇方

白朮　桂心各十六　防風一分
藁茭　麦冬　蜀椒　桔梗各参
大黄参　烏頭二分五リ　赤小豆十粒
右の薬を三角の紅の袋ニ入除夜ふ井の底
ふつけて元日に取出――酒ふつけて呑バ
元ゝまこの其外一切の邪氣をさる
○時珍曰蘇ハ魅氣の名此薬一切の
鬼疫を屠鄙る故ふ名づくゝ

右の外包ゝ本式薬方諸医の論
悉く丸散手引草ふ委――見るべし
○長生仕様傳といふる本ハ平らみ小本
一冊ゝ〳〵人間長寿を得の法妙薬
秘傳とのゝ小児誕生ゝゝそ抱
産前産後心得土ニ生ゝ子ハ短
命ゝゝ〳〵ふる法長寿セ――ゝる術
其外一生の間養生のゝゝとのゝ

飲食

此部ふハ入カみて裝し
ゝる食物をあゝむ

鯛味噌

生鯛の腸骨を去て
身ゝゝ味噌ふ和し
よきゝゝんふ煮爛――泥のゝゝと
(非)細味ゝやゝ甘ゝ拙なん　兒十

煮凝

何魚ゝも油ゝゝ魚を煮
て一夜越れバ煮汁氷ゝ
(非)こんゝゝもゝの餅ゝゝる

凝豆腐

○氷ゝちハ氷ふつけ置
てひせばもゝの餅ゝゝる
てゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

秋光

(狂)元二の雪降る日ひれど彩降
ぬらーをいそひもちひん　隆峯

△寒曝　餅米を製まる(俳)寒晒
あぶく仕ふ名の内　其角

△寒餅　寒中に製る餅はかび
出る事なく味も美

(狂)雪の降年をふるもわうくと
乳のもちゆーてうびぬつき合　左方

△寒造酒　(俳)酒屋や雑ふやみぬ
雪を造り　白面

(狂)ひとらるる酒はつくり雪つくり
これて君をよれ酒ぞうあるる　松両

△藥喰　鳥獸の肉其外陽物を
食ーて寒をふせぐまくる

(俳)茶ひ豆好会点の和面い　野水
翁ひ歌のきくいもをちくれ　李左

△鹿賣　此頃専ら鹿の肉を煮く
者を冬に此肉を喰へ肉を補
い気をうー血脈を通ーて大に益有

(俳)鹿賣や踏ふ手て行くもの市　麥夫

十二月飲食並料理献立

禁物　獐肉○猪肉○霜ふ烟
まこう菓菜と食ふ事な

好物　芋頭　今月食ふべーー他
月々ーい病と生ぞ

料理

汁　たいづげ　塩こう
よちな　丸むそうど

そうれけし多　たら
木のこ　ふくさ　茶せん筋ぎ
しふくうろ　うぐいすん

むかびせう
つぶふつけ

まき葉　こぬく
ごまあ　ゆうらて屋とち

清汁　長いーー　がん
こせう　さんせんれ粉

鴨　生あひ
ひとんの

貝　赤づう
ぼうくうぐう
すくうげ　ぼうぶ
ぼくん

膾　鯛・赤ひ
たくん・うど
ぼう・ぼうが

鰹・くーげ
柳・たくん・うど
きんくんぐいぼ

差味

生鯛 角切
生うつみ
おろし 雪仕

こい
宗さけ

生あらびせん
くぐげ・大えん
若そま

きすご・くぐげ
ごぼう・そぼろ
いくら・わさび

ふる 作り方
そば・かんん
ふりぜうが あまぜ

にし 白ま 鶴皮引
たんざく 大えん
そぼろ・ごぼう たなぐさ

焼ぶ さいろ
つくくし
くりの 煮ー

煮物

にりの
きんこ・きう ぶ
むるの・かい 本 房
むるまろ

鴨
ろうる
ひぎん 煮こ

たいこんぶ
そぼろ ごぼう
松ぶ

おちゃえて切せんば
ゆーたま まこ

白ぶ紙ゆて
くりあん
うぐいす

一塩鮭
ぶのこ
せんごう

生鯛ゆて
うぐいす
ぐぐ

和合物

あへ
生ぐい角切
うぐいす
ぐぐ

串ぐい
ぶ あへ

鳥賊

生あへび
ゆくーけ
まあへ

ゆーげ
ちゃくーろぎ
ぶ まこ

くるま えび
ゆうぐ けい

赤にし
ふうぐ

吸物

かき
ぞう

生麩
ふきのぞう

かーしと
ごぼう そぼろ

鴨
ぞう
きんぞう

かき
つぶ 赤味
こーぞう

精進汁

むらびせん
つぶーゆたけ
まのう

あげえんやく
ねろーたえん

くぐーぞう 数
きろーげ まく

そく ひぞう
きんろん
まのう けい

ぞう 数
ぞう

ぞく
かーし

ぞう 数
ぞう

清汁

たう
うーねる
ぞくびん

小根ばー
彩ま えん
こぞう

ぞく し
あげぞく へ
うど・ぞう

ぞく
あげふ・ゆで
ぞう・えんぞう

膾

たえん・まあけ
ぞう・まうぐ
きんかん

差味

たえん 小口切
あげこ
ぞうけふ

あげふ・ゆで
ぞう・えんぞう

むーいも たんえ
ぞくーげ・川ちと
ぞくび いろ 酒

さろまいも
ぞくーぐん 母
ぞうまみ

大根

たけえ ゆで
ぞう

氷

こんぶ やくーん
ぞうこう

三杯そうめん
ぞくけ・ぞくび
いろ 酒

平野修篆刀

桜花堂

煮物

和會物

漬物

時物

鳥

魚

青物